

旅 に出るときに、わらじを履く。

素足でわらじを履くと足を痛めるので、一枚の鹿皮(単皮)から足を包むように袋をつくる。

かくして、単皮からできた旅のための履物は、やがて西足をろうと4つの鼻(多鼻=たび)にも見えることのある履物として親しまれ、普及する。

単皮、旅、多鼻のすべてに連なるらしい足袋は、足の袋と書くけれども、けっして単なる足の袋であってはいけない。履きやすさ、履いて疲れないのは最低条件。足にはほっそりとうようでありながら、しわひとつ寄ることのない凜とした張りをたたえるのが理想の足袋であろうか。

そんな理想の足袋を、顧客一人ひとりの注文に応じて作る職人は、今では希少な存在になった。そのひとりが、1987年(慶応3年)創業以来、ひたすら足袋をつくり続ける「向島めうがや」の第五代目当主、石井芳和さんである。

柱に「足袋芳」の文字も美しい店頭には、小花柄や幾何学模様など、カフフルで小粋な柄の足袋の数々が飾られるが、この柄足袋はめうがやオリジナルで、既製である。石井さんのつくる足袋の7割ほどは逃で、これは顧客のもとへ直接届けられる。

「いい足袋をつくるには、最初と最後の工程が肝心です。ここですべてが決まります」

最初の工程とは、型紙づくりだ。一足分の型紙をつくるのに3時間かかる。右、左、それぞれの足の各部分の寸法を細かく測るばかりか、ごく小さな足のクセや爪の長さ、むくみの有無までチェックし、20か所以上にわたるデータを打てる。このデータをもとに、左右別々に底、親指側、小指側と型紙を起こすので、計6枚1セットの型紙をつくることになる。

この型紙をもとにまず一足つくる。これはもちろん製品だが、いわばテスト版でもある。客に履いてもらい、3回の洗濯を経たのちに最終確認するのである。その段階で「きもちよく見せたいんです」とか「ここがきもちよく感じると」か「きもちよく」という客の「きもち」を聞きとり、改良版をつくる。必要であれば二度でも三度でもこのプロセスをくり返し、最終的にOKがでたら残りのパフエクトなら足を納品する。あ、逃

え足袋は6足以上からなのである。「何ミリとかでは言い表せない、お客様の「きもち」を正確に量って、具体的にどこをどう変えるのか、そこが職人としての腕の見せどころなんです」

とって、この仕事の最大の喜びは「お客様の反応が直接、返ってくること」。ごまかしのきかない一対一の仕事に、厳しさと面白さをともに味わっているという。

一対一、と書いたが、厳密に言えば、石井さんご家族も仕事を支えている。いずれ六代目となる予定の長男の健介さん(29)、次男の康介さん(24)、そして奥様のきよ子さん。取材にうかがった日は、健介さんが丸包丁で生地を裁ち、店の奥ではきよ子さんと康介さんがミシンがけを行っていた。家族ぐるみでいねいに「はっぴー」の10足ほど。

また家族の誰も手伝えない部分がある。それが「最後の工程」、すなわち、親指部分のミシンがけである。「つまつけミシン」という特殊なミシンを用いる親指部分は、芳和さんしかこなせない。「1日使わないと、調子が悪くなる」80年前の製品だから、壊れたらもう部品がない」というこのドイツ製のミシンは、もともと革靴を縫った

めのものであった。親指部分を丸く立体的に仕上げするためにいせこんでいくには、熟練職人ならではの「カン」に支えられたテクニックが必要なのだそう。型紙づくりは任せてもらえるようになった健介さんでも「いやあ、このミシンだけは、やっぱりまだ、親父じゃな

いとムリです」。

そんな健介さんを、芳和さんは父として親方として、淡々と温かく見守っている。

「腰痛でつらいとか、いい仕事をしなきゃいけないというプレッシャーなど、いろいろ苦しいこともあるでしょうけど、それをじっと辛抱して乗り越えてほしいですね。乗り越えたあとに、ああ、こういうものか、とわかるおもしろさや奥深さが、この仕事にはありますから」

Who's who?

足袋職商人

あきんど

石井芳和 54歳



向島めうがや
〒131-0033 東京都墨田区向島5-27-16
tel&fax: 03(3626)1413
ぱりっとしたキャラコの美しい白足袋が6足からオーダー可。
型代は(初回のみ)¥10,500、4枚コハゼは1足¥4,410から。
贅沢な自分だけのひと品だ

中野香織=文
text: Kaori Nakano
福知彰子=写真
photographer: Akiko Fukuchi

